

論文

肯定形を伴う「誰+も」の構文的分布

姚 佳秀

Syntactic Distribution of Japanese “dare+mo” Interacting
with Affirmative Forms

Jiaxiu YAO

鹿児島国際大学大学院学術論集 第15集 17-24頁
THE IUK GRADUATE SCHOOL JOURNAL, 15: 17-24
Issued on November 30, 2023

論文

肯定形を伴う「誰+も」の構文的分布

姚 佳秀¹

Syntactic Distribution of Japanese “dare+mo” Interacting with Affirmative Forms

Jiaxiu YAO¹

Abstract

In modern Japanese, the form “dare+mo” is usually used in conjunction with the negative form of a predicate to deny human actions, behaviors and status. However, under some semantic conditions, this form can be used with the positive form of a predicate to affirm human actions, behaviors and status. This paper divides the syntactic distribution comprising the collocation of “dare+mo” and affirmative predicate into two groups, namely the “typical” and “non-typical.” Furthermore, the researcher elaborates and discusses these two types of divisions by introducing a theoretical framework of co-occurrence restrictions. This paper aims to clarify the syntactic distributions of “dare+mo” when interacting with the affirmative form so as to establish the grammatical norms for the acquisition of a second or additional language.

キーワード 肯定形, 構文的分布, 「誰+も」の使用条件

Keywords: affirmative form, syntactic distribution, conditions for language learning

1. はじめに

「誰+も」は通常、否定の意味を含む述語を要求し、人の動作・行為及び状態をすべて認めないという意味を表すものである。しかし、例(1)に示すように、一定の統語的条件を満たしていれば、肯定の意味を表す述語を伴うことが可能である。肯定形の述語を伴う場合の「誰+も」は物事の存在や意義をすべて認めるという意味を表すものとして認められる。

(1)「人は誰も楽な生き方を望む」「私はあ違います」
志乃が声を尖らせた。(黒崎裕一郎『密殺 冥府の刺客』)

例(1)の下線部の「誰+も」は肯定的意味を表す述語と呼応し、「例外なし」という意味を表している。否定形を要求する「誰+も」の意味・用法に関する研究は数多くみられるが、肯定形を伴う「誰+も」の意味・用法に関する研究はあまりなされていないようである。例(1)のような現象は日本語学的研究のみならず、日本語習得

研究にとっても資料的価値があるため、無視してはならない。本稿の研究目的は肯定形を伴う「誰+も」の構文的分布を明らかにし、そうすることによって、第二言語習得の研究に寄与することにある。

以下、第2節では先行研究の妥当性を検証し、代案を示す。第3節では、肯定形を伴う「誰+も」の典型的な意味・用法について述べ、第4節では、肯定形を伴う「誰+も」の非典型的な意味・用法について述べる。第5節では、新たに得られる知見をまとめる。

2. 先行研究の問題点

「誰+も」の意味・用法に関する研究は数多くみられるが、代表的なものとして尾上圭介(1983)、益岡隆志・田窪行則(1992)、寺村秀夫(1991)、仁田義雄(2009)などが挙げられる。益岡隆志・田窪行則(1992)では、「だれも、どれも、なにも、どこも、どちらも、いつも」などは否定表現を伴い、対象の不存在を表すとされている。

¹ 郵便番号：116044 遼寧省大連市旅順口区旅順南路西段6号 大連外国語大学

Lecturer, Dalian University of Foreign Languages, No.6, West Section, Lvshun South Road, Lvshunkou District, Dalian 116044, Liaoning, China
2023年5月18日受付, 2023年9月21日採録

益岡隆志・田窪行則（1992）のほかに、寺村秀夫（1991: 83）では、「ドコ、ダレ、ナニなどの疑問名詞（+格助詞）にモが付いて、それが否定の述語で結ばれると、(V)の場合と同様、全部否定になる。」のように述べ、「疑問詞+も」という文型については、「そのセットのどのメンバーをとりだしても、それに対応する述語は否定」という意味を表すとされている。さらに、「ダレモ、ナニモ、ドンナ～モ、ドウモなどは、肯定的述語とは結びつかない。結びついても非常に不自然である。」¹⁾のように指摘されている。

寺村秀夫（1991）で取り上げられたナニモ、ドンナ～モ、ドウモなどは本稿の研究テーマと関係がないので、ここでは触れないことにする。しかし、「誰+も」の意味・用法に関する指摘は賛同できない部分がある。具体的に言えば、例(1)における「誰+も」は「楽な生き方を望む」のような「肯定的述語」と結びついているにもかかわらず、文としては自然なものである。このような見解は10人の日本語母語話者に対するアンケート調査によって支持されている²⁾。

一方、仁田義雄（2009: 162-163）では、疑問詞に「も」がついたものは、基本的に否定の述語と共起し、同類のものすべてを否定し、否定形の述語を肯定形の述語にかえることはできず、ただし、疑問詞によっていくつかの例外があるとされている。たとえば、「だれも」の形では、否定の述語としか共起しないが、その後「が」がついて「だれもが」の形になれば、肯定形の述語とも共起できるようになると述べている。しかし、やはり例(1)を根拠とするが、文中の「誰+も」は必ずしも格助詞の「が」を必要とするとは限らない。

以上のような事実から、先行研究で示されたルールは上記の例(1)について合理的に説明することができないと思われる。具体的に言えば、「誰+も」が肯定形を伴う場合、「誰+も+が」のみならず、「誰+も」の後に格助詞の「を」が付き、目的語として機能したり、格助詞の「の」と一緒になって、連体修飾関係を結んだりする意味・用法がみられるのである。しかし、これらの意味・用法について先行研究ではあまり言及されていないようである。

(2)キックで世界一の實力を持つ「天才キッカー」宮間のCKは誰もをうならせ、勝利に導いた。(『毎日新聞』2014/05/23)

(3)アメリカに住むことは白人の権利であるとともに、黒人の、そしてだれもの権利であると筆者は

主張するのである。(荒このみ『黒人のアメリカー誕生の物語』)

確かに「誰+も」は多くの場合において否定形の述語となじむ関係にある。しかし、例(2)(3)のような意味・用法も無視してはならない。例(2)(3)のような現象を説明するためには、「誰+も」の構文的分布に注目する必要があるように思われる。

渡辺実（1996）では格助詞の「が」「を」は最も格助詞の特徴を備えているものであり、それに対して、「と」「より」「から」などは格助詞の特徴をさほど備えていない³⁾と指摘されている。そのような見解に基づいて考えれば、例(1)(2)(3)のような意味・用法は肯定形を伴う「誰も」の典型的な用法と位置づけられ、下記の例(4)(5)(6)のような意味・用法は肯定形を伴う「誰も」の非典型的な用法と位置づけられるだろう。

(4)だれにも、その独自の旗の下でオリンピックに参加する権利がある。(伊藤千尋『バルセロナ賛歌』)

(5)誰とも最初会った瞬間に親しくなり、誰もがかれを好きになった。(L. ザッヘル=マゾッホ|著; 池田信雄, 飯吉光夫|訳『残酷な女たち』)

(6)ツクヨミはその愛おしさを、誰よりも自分自身にごまかしたくて話題を変えた。(十掛ありい『月を読む君』)

例(4)(5)(6)に示すように、「誰+も」の発展的な形式としての「誰にも」「誰とも」「誰よりも」はいずれも肯定述語を伴うことができる。そのような意味・用法については先行研究では具体的に触れていないようである。

一方、姚佳秀（2018）では対照研究の観点から肯定形と結びつく「誰+も」の構文的分布に触れている。しかし、当該研究では例(1)(2)(3)(4)(5)(6)のような文における「誰+も」の意味・用法について一律に扱われているため、肯定形を伴う「誰+も」の構文的分布の内実を明らかにしたとは言いがたい。

以上のようなことから、従来の研究では肯定形を伴う「誰+も」の意味・用法が明らかにされたとは思えない。そのため、本稿は例(1)(2)(3)(4)(5)(6)のような文における「誰+も」の意味・用法について、意味特徴のほかに、統語機能も視野に入れて、分析を行う。同じ格助詞でありながら、「が」は必ず「誰も」の後ににおいて機能するのに対して、「に」「より」などは「誰」と「も」の間において機能しなければならない。そのような事実を踏まえて、本稿では肯定形を要求する「誰もが」「誰もを」「誰も」を典型的な意味・用法として位置づけ、「誰にも」

「誰とも」「誰よりも」を非典型的な意味・用法として位置づける。

以下では、「典型」と「非典型」の二つの角度から肯定形を伴う「誰+も」の意味・用法について分析を行う。

3. 肯定形を伴う「誰+も」の典型的な意味・用法

コーパスを観察した結果、「誰+も」は肯定形を伴う用例がそれほど多くはなく、肯定形を伴う場合の典型的な意味・用法は次のように分布していることを突き止めた。①「誰+も」の後にさらに格助詞の「が」が生起し、主語として機能する場合、②目的語として機能する場合、③「誰+も」の後にさらに格助詞の「の」が生起し、連体修飾語として機能する場合、④「～でも～でも+誰も」「～も～も+誰も」のような形で並列関係を構成する場合である。以下、順を追って述べていく。

3.1. 主語として機能する場合

先述したように、「誰+も」が主語として機能する場合、一定の統語的条件を満たせば、肯定形を伴うことが可能であり、そのような意味・用法は一過性ではなく広範囲に分布している。主語として機能する場合は「誰+も」の後にさらに格助詞の「が」が後続することが多い。ただし、目を述語に転じてみると、可能の意味を表す動詞の肯定形が現れやすいことに気づかされる。また、肯定形を伴う「誰もが」は「NP+は」を受けたり、「NP+なら」を受けたりして文を展開させることがある。ただし、主体を表す場合は格助詞の「が」が省略されることがある。

(7) 誰もが自分の将来を、自分で決めることができる。それは人間の権利である。(長山靖生『若者はなぜ「決められない」か』)

(8) 日本共産党は、「健康で文化的な最低限度の生活」をすべての国民に保障し、社会保障の増進を国の責務と明記した憲法25条の立場から、だれもが安心でき、将来に希望のもてる社会保障制度を構築する改革に取り組みます。(『朝日新聞』2013/07/11)

(9) 思ったことを、だれもが素直に、すぐ文章にできる。その能力がすごい。(『朝日新聞』2013/07/14)

(10) 「やるだけです」誰もがそう答えた。「それがヤクザですから」ともいった。(向谷匡史『ヤクザという生き方』)

(11) でも、とおりにすぎるだれもがうつむきがちに歩いていました。(村山早紀『新シェーラひめのほうけんベガサスの騎士』)

(12) 水を節約するようにと言われた途端に、誰もが水を飲み始める。(曾野綾子『アラブの格言』)

(13) 他人があまり評価しないものをいいなと思っちゃう場合もあるし、だれもが認めているものを、なんでこれがいいの？(永六輔『職人』)

例(7)～(13)では「誰+も」が主語として機能していると思われる。また、例(7)(8)(9)に示すように、「誰もが」は可能を表す述語と意味関係を結ぶことが多い。つまり、動詞の可能形や「V+ことができる」といったパターンがよく用いられるのである。このことは例(7)(8)(9)の述部を見ても明らかである。例(7)～(13)の「誰+も」は格助詞の「が」を伴い、肯定形の述語と意味関係を結び、例外なく、何かをすることができることを表している。

アスペクトの観点からみれば、「誰+も」の要求する述語は完了のことを表しても、未完成のことを表してもかまわない。具体的に言えば、例(10)(11)のように「誰+も」は完成を表す「答えた」「歩いていました」のような述語と意味関係を結び、また、例(12)(13)に示すように「誰+も」は未完成のこと、或いは進行中のことを表す「飲み始める」「認めている」のような述語と意味関係を結んでいるのである。

さらにもう一つの現象を無視してはならない。「誰+も」は係助詞の「は」や副助詞「なら」を受け、文を展開させることがある。そのような構造では、前置の「は」「なら」は特定の範囲を取り立て、「誰+も」の後につく「が」はその範囲内のすべてという意味を表すのである。下記の「人は誰もが～」の構文的特徴は「魚は鯛がいい」と似通っている⁴⁾。

(14) 人は誰もが自分や自分のかかわった出来事を記述する際に、どうしても自分を美化しがちである。(黒古一夫『三浦綾子論「愛」と「生きること」の意味』)

(15) 十二月に入り、街ゆく人は誰もが早足で歩いていた。訳もないのに気が急いでしまう、そんな季節だ。(吉元由美『天使の樹』)

(16) 永住ビザ申請から取得までには、どれほどの時間がかかるかは、当事者なら誰もが気になるところですが、……。 (大坂晃典『思いきって海外ひとり暮らしカナダ』)

(17) あのいかにも爽やかなやり取りの裏で、どんな感情が交錯しているかは、永田町の住人なら誰もが知っている。(伊藤惇夫『永田町権力者たちの情報戦争 政治家はこうして“消される”』)

(18)「人は誰も楽な生き方を望む」「私は違います」志乃が声を尖らせた。(例(1)を再掲)

(19)浜に出てみんなで集まるのは愛の結節点の表象だと私たちは誰も知っている。(稀土祥子『駅に住人』)

例(14)(15)における「～は誰もが」、例(16)(17)における「～なら誰もが」、例(18)(19)における「～は誰も」のような構造については「は」「なら」によって範囲が示され、その範囲内において「すべての人」という意味を表すものとして解釈されうる。具体的に言えば、「～は誰もが」「～なら誰もが」は動詞の肯定形と共起し、取り立てられた範囲内において「例外なし」という意味を表していると考えられる。構文的特徴をみれば、「誰も」はさらに「が」を伴い、文法的に主語となることを表すが、例(18)(19)に示すように主語のマーカーとしての格助詞の「が」が現れないこともある。このような場合は格助詞の「が」が省略されたと考えられる。ただし、「が」が省略されても、「誰も」が主語として機能することには変わりがない。このことは、例(18)(19)における「誰も」は「みんな」で置き換えられることによって裏付けられる。

さらに、もう一つの現象を見逃してはならない。否定形でなくても述部に否定的な意味が含まれる場合、「誰+も」は実際にすべてを否定する意味を表すということである。

(20)誰もここへ上げちゃ駄目よ。(井上靖『射程』)

(21)その細長いテーブルには先客が四人ほどいて、雑誌を拾い読みしたり頬杖を突いたりしていたが、彼女が来た時には誰も口を噤んでいた。(福永武彦『死の島』)

例(20)の述語としての「駄目」と例(21)の述語としての「口を噤んでいた」は肯定形であるものの、内実は否定的な意味を含むものである。そのような場合、「誰+も」は人の動作・行為及び状態が通常のレベルに達していないという意味を表すものとしてとらえられる。

3.2. 目的語として機能する場合

以上の分析によって、「誰+も」は格助詞の「が」を伴っていても伴ってなくても、主語として機能しうるということが明らかになった。また、「誰+も」は一定の統語的条件を満たしていれば、格助詞の「を」を伴い、目的語として機能することができる。そのような場合は目的格に立ちうるすべての「人」が例外なしに働きかけられ、主体から行為をこうむるという意味を表す。

(22)キックで世界一の實力を持つ「天才キッカー」宮

間のCKは誰もをうならせ、勝利に導いた。(例(2)を再掲)

(23)それに対して選手本人は27日、「ツイッター」で「モンペリエへの移籍が実現しなくて残念。チーム、町は素晴らしいが、会長は誰もを貶すような愚か者」と反応し、波紋を呼んでいる。(『朝日新聞』2013/06/28)

(24)ピスタチオをまとったミルクアイスは、老人から子供まで、誰もを虜にってしまう。(『毎日新聞』2014/03/25)

(25)シャンソンはそのすべてを包み込み、だれもを幸せな気分にしてくれるのだろう。(『毎日新聞』2010/02/19)

例(22)(23)(24)(25)における「誰+も」は目的語として機能し、すべての「人」が述語の表す行為をこうむることを表すのである。目的語として機能する場合の「誰+も」には二つのパターンがある。一つは副助詞の「も」が格助詞の「を」の前において機能する「誰もを」のような構造であり、もう一つは副助詞が格助詞の後において機能する「誰をも」のような構造である。両者は意味的にはさほど変わりがない。いわば、例(26)(27)(28)(29)における「誰をも」は「誰もを」に置き換えても意味的には大差がない。

(26)確かな技術から生みだされる世界トップフレンチは誰もを虜にします。(『朝日新聞』2014/03/26)

(27)静かに落ち着いた田畑の中に堂々と建つ茅葺き合掌の里は、旅人の郷愁をそそり、誰をも再度訪れたいと思わせるであろう魅力があった。(秋野沙夜子『熟年夫婦の味わい』)

(28)水鳥は誰もを許し、温かく大きな心で包みこむ。(渡辺一雄『小説「翔べ!そごう」』)

(29)道中ただただ自然と風景を心行くまで楽しむ二所詣の旅は、また大勢の供の者達誰をも饒舌にし、よく笑わせ、打ち解け合やす。(五車英男『天華舞う 右大臣源実朝』)

例(22)(23)(24)(25)と例(26)(27)(28)(29)に示すように、副助詞と呼ばれる「も」は格助詞の「を」の前においても後においても機能しうるのである。ただし、「誰をも」の場合は「も」がすでに連用成分を構成した「誰を」の後に付加され、副助詞の役割を果たすのに対して、「誰もを」の場合は「も」が接尾辞のような働きをし、素材の一部として役割を果たすのである⁵⁾。

3.3. 連体修飾語として機能する場合

「誰+も」は格助詞の「の」と一緒になって連体修飾関係を結ぶことができる。中西久実子(2012)では疑問詞の後につく副助詞の「も」の意味・用法について記述がなされているが、「誰+も」が格助詞の「の」を伴い、連体修飾語として機能する意味・用法については触れていない。しかし、コーパスを観察したところ、「誰もの+NP」のような連体修飾関係が多く存在していることを突き止めた。

(30)衆環境の中にあるもの、誰もの身近にあるもので、人種、国籍、性別、年齢などをすべて超えたもの、……(石岡瑛子『私デザイン』)

(31)だれもの頭に故郷がうかび、だれもの口から台湾ということばが出そうになり、胸にあついものがこみあげてきかけた。(かつおきんや『緑の島はるかに一台湾少年工物語』)

(32)いかにしたら同じ過ちを二度と繰り返さないことが出来るかへの、誰もの真剣な思いと考へ。(五車英男『天華舞う 右大臣源実朝』)

(33)結果は、主催者を含めた誰もの予想を裏切り、赤・白ともにカリフォルニアが1位を占めた。(『朝日新聞』2007/07/09)

統語的には、例(30)(31)(32)(33)における「誰も」は連体修飾部として後続のヘッド部に連なっている。意味的には、例(30)(31)(32)(33)における「誰も」は「すべての人」という意味を表すものとして解され、それがヘッドとしての「身近」「頭」「思い」「予想」の所有者として見なされ得る。ただし、例(32)(33)の深層にはヘッドとしての「思い」「予想」といった行為の主体が示唆されていることを見逃してはならない。さらにもう一つの事実を無視してはならない。それは「誰をも」は「誰もを」のように置き換えてもかまわないが、連体修飾関係を結ぶ「誰もの」は「誰のもの」のように置き換えてはならないということである。

3.4. 並列関係を受ける場合

「誰+も」は「でも」や「も」によって構成された並列関係を受けて文を展開することがある。述語が肯定形であるので、そのような場合の「誰+も」は前置の並列関係によって示された人を含む「すべての人」という意味を表す。

(34)それぞれのプログラムが45分で、若い方でも、家族連れでも誰もが気軽に楽しめるようになっていきます。(『読売新聞』2013年04月06日)

(35)点字を巡る問題を理解してもらい、高齢者でも障害者でも誰もが暮らしやすい社会を目指す企業の姿勢もアピールしている。(『読売新聞』2012年01月20日)

(36)同法成立と条約批准を契機に、障害がある人もない人もだれもが安心して暮らせる社会になってほしい。(『朝日新聞』2013/12/06)

(37)だがそんな中であって、サッカーファンも映画ファンも誰もがこよなく愛する映画が存在する。(『朝日新聞』2013/01/19)

例(34)(35)(36)(37)に示すように、「誰+も」は副助詞の「でも」「も」によって構成された並列関係を受ける場合、ほかにも同様な人がいるという言外の含みを持つものとしてとらえられる。ただし、そのような構造的特徴を有する並列関係を受ける場合は「誰もが」を省略して言うことが可能である。いわば、例(34)(36)の「誰も」節については「若い方でも、家族連れでも気軽に楽しめるようになっていきます」「障害がある人もない人も安心して暮らせる」のように言うこともできるのである。

また、例(36)(37)では三つの「も」が生起しているが、最後の「も」が前置の二つの「も」と異なる意味・機能を担っていると認めなければならない。つまり、例(36)(37)の「障害がある人もない人も」「サッカーファンも映画ファンも」は「XもYもP」のような並列関係であるのに対して、「誰+も」における「も」は並列関係を結ぶものとして認めてはならない。「XもYもP」における「P」の一部として同類のものとしての二つ或いは二つ以上の並列成分を包括した形で取り立てているのである。このような意味・用法については、管見の限りでは、これまでの研究では言及されていないようである。

4. 肯定形を伴う「誰+も」の非典型的な意味・用法

第3節では肯定形を伴う「誰+も」の典型的な意味・用法について述べた。この節では肯定形を伴う「誰+も」の非典型的な意味・用法について分析を行う。いわゆる肯定形を伴う「誰+も」の非典型的な用法は格助詞の「に」「と」「から」「より」と一緒になって文を展開することである。ただし、「が」「の」は必ず「誰+も」の後において機能するのに対して、「に」「と」「から」「より」は「誰」と「も」の間において機能しなければならない。つまり、「誰+に+も」「誰+と+も」「誰+から+も」「誰+より+も」のような形で用いなければならない。「に」

「と」「から」「より」は「誰」と「も」の間において機能するがゆえに、非典型的な意味・用法として位置づける次第である。

4.1. 「誰+に+も」の構文的分布

「誰+も」は格助詞の「に」を挟んで、抽象的な存在の場所を表したり、行為・作用の向けられる相手を表したりすることができる。そのほか、受身表現における行為の主体を表したり、使役表現における行為の向けられる側を表したりすることもできる。まず、抽象的な存在場所を表す意味・用法をみる。

「誰」は「誰にも～がある」という文型をつくり、物事の抽象的な存在場所を表すことができる。つまり、存在する物事は必ずしも目で確認することができるとは限らない。

- (38)だれにも、その独自の旗の下でオリンピックに参加する権利がある。(例(4)を再掲)
- (39)罪は誰にもあります。誰にも古い性質があるからです。(高木慶太『恵みによる信仰生活』)
- (40)「誰にも自分の畑があるはずだ。…私は何時も君の畑にいる」。(安森敏隆『介護・男のうた365日 大学教授の介護日記』)
- (41)息子はそれを後ろ手に隠した。誰にも、秘密があるのだろう。話しても誰にも信じてもらえぬような…。(井上雅彦『怪物晚餐会 怪奇幻想短編集』)

例(38)(39)(40)(41)における「権利」「性質」「自分の畑」や「秘密」などは抽象的な事柄であるがゆえ、形のあるものとして把握することができない。そのため、「誰+に+も」は抽象的な存在場所を表すものとしてとらえることが可能である。

「誰+に+も」は抽象的な存在場所を表すほかに、判断や評価の範囲、基準及び行為の向けられる相手、或いは目標を表すことがある。

- (42)想起はかつての現在の再現や再経験でないことは誰にも明白だろう。(大森荘蔵『時間と自我』)
- (43)ジャガイモは、誰にもなじみの野菜だが、芽の部分には、ソラニンという毒素があって、多食は禁物だ。(奥山久『山菜 野山からのおくりもの』)
- (44)この人々の華やかな装いと長く伸ばした髪から、彼らがエトルリア人であることは誰にもわかった。(塩野七生『ローマは一日にして成らず』)
- (45)それは、必ず果すことのできる約束だった。誰にも起きることについては、誰にもどうしようもないに違いない。(北方謙三『鱒・街の詩』)

例(42)(43)における「誰+に+も」は判断や評価の範囲、基準を表し、例(44)(45)における「誰+に+も」は行為の向けられる相手や目標を表している。そのほかに、「誰+に+も」は受身表現の行為の主体或いは状態・心理活動の所有者を表すこともできる。

- (46)この小宰相どのが引きうけて、姫君はじめ女中衆だれにも頼りにされている。(杉本苑子『月宮の人』)
- (47)「誰にも喜ばれる繊細な味わい。つい“もうひとつ”と手を伸ばしたくなります」(『あの人を選んだ東京手みやげ』)
- (48)ここだけは春になったことがだれにも認められる。そのころになると、村人がセリを摘みにくるようになる(小宮宗治『定年後・八ヶ岳いなか暮らし』)

例(46)(47)(48)における「誰+に+も」の意味・用法を例(42)(43)(44)(45)における「誰+に+も」の意味・用法と同一視してはならない。例(42)(43)(44)(45)における「に+も」は判断や評価の範囲、基準及び行為の向けられる相手や目標を表すのに対して、例(46)(47)(48)における「に+も」は行為の主体或いは状態・心理活動の所有者を表すのである。このような違いは例(46)(47)(48)を主述文に置き換えてみれば一目瞭然である。具体的にいえば、例(46)(47)(48)の述部はそれぞれ「だれもが頼りにしている」「誰もが喜ぶ」「だれもが認める」のように置き換えて言うことが可能であるのに対して、例(42)(43)(44)(45)の述部はそうのように置き換えて言うことが不可能である。「頼りにしている」「喜ぶ」は状態を表し、「認める」は心理活動を表すものである。さらに、「誰+も」が格助詞の「に」と一緒になって、動作や行為の主体を表す場合、「に」は格助詞の「から」で置き換えることができる(4.3で詳しく述べる)。

「誰+に+も」という構造は受身文に限らず、使役文において、使役の対象(述語動詞の表す動作の担い手)を表すこともできる。

- (49)視線で周囲を意識し、非情で身のこなしが軽く孤独であるという印象を誰にも抱かせる女性を、いまの社会に現われた宇宙人のような人間として創りあげた。(中島誠『宮部みゆきが読まれる理由』)
- (50)その語り草のことが誰にも思い出せるし、だから、いまその木を伐ることが、ヨネにとって常人の想像を超えた意味があるに違いないと、こわ持てしているのだ。(大城立裕『水の盛装』)

例(49)(50)は使役文であり、文中の「誰+に+も」は

使役行為の仕向けられる側を表し、「誰」が行為の仕向けられる人となるのである。受身文や使役文では「に」格にあるものが行為の主体となるが、述語が精神作用を表す受身文における「誰にも」は「誰からも」のように置き換えられるのとは異なって、使役文における「誰にも」は「誰からも」のように置き換えると、不自然な表現になる。

4.2. 「誰+と+も」の構文的分布

格助詞の「と」は「誰」と副助詞の「も」の間に生起し、「誰+と+も」という形で「例外なし」という意味を表すことができる。格助詞の「と」は普通、行為や作用と一緒に رفتり関係を結んだりする相手を表すが、例(51)における「誰+と+も」と例(52)(53)における「誰+と+も」には少し意味のずれがあるので、同様に解釈してはならない。

(51)化粧はしないこと。誰とも口をきいてはだめ。(ミリアム・ローリーニ(著)/興津真理子(訳)『ウーマンズ・ケース』)

(52)よくよく見ていると、京子に悪気はない。だれとも仲良くやるが、だれとも親しくつき合わない。(若林ミヤ『風俗嬢・私は「つかの間」の愛を売る』)

(53)誰とも最初会った瞬間に親しくなり、誰もがかれを好きになった。(例(5)を再掲)

例(51)(52)(53)において「誰」に後続した格助詞の「と」は一緒に行為を行う相手を表すことには間違いない。しかし、焦点を述語に絞ると、「口をきく」という行為は必ずしも相手を必要とする行為ではないのに対して、「仲良くする」「親しくなる」といった行為は相手を欠いては成立しない。いわば、「口をきく」という行為は相手なしでも成立するものである。それに基づいて考えれば、例(51)における「誰+と」は行為の向ける対象を表していると考えられ、例(52)(53)における「誰+と」は欠けてはならない共同行為の相手を表していると考えられる。

4.3. 「誰+から+も」の構文的分布

「誰+から+も」という構造については二つの解釈が可能である。一つは受身文において、動作や行為の主体を表すものであり、もう一つは補語として、動作・行為の出所、物の離れる場所或いは物の出所を表すものである。まず、受身文における「誰+から+も」の意味・用法を見る。

(54)しかし、このとき昭二は、そこまでは考えられず、自分ひとりがだれからも見捨てられて、上野駅の

片隅に投げ出されている気がした。(佐江衆一『幸福の選択』)

(55)特にご婦人の皆様は、見栄や虚栄に生きるのではなく、信心の輝きにあふれる、誰からも信頼される人になってください。(池田大作『新・人間革命』)

(56)穏健な共和党员であったこの判事は、常識家でだれからも好かれる性格であったらしい。(阿川尚之『憲法で読むアメリカ史』)

(57)人の喜ぶ顔を見るのが何よりも好きという伯父のそんな性格は誰からも好感を持たれたが、……(菅敏彦『熊蟬』)

例(54)～(57)における「誰+から+も」はそれぞれ「見捨てられる」「信頼される」「好かれる」「持たれる」のような受身表現と一緒に使われ、「誰+から」は動作や行為の主体を表している。当然のことながら、その「主体」は特定の人ではなく、不特定の人物でなければならない。

格助詞としての「から」はもとより起点や出発点、または出どころを表すものである。「誰」はそのような意味・用法を有する「から」と一緒になって用いられる場合、物の出所或いは離れる場所や回避の対象を示すことがある。

(58)共同社会(国や地方公共団体)を維持するため税金が徴収されるのであるならば、だれからも公平に徴収することがのぞましい税制の第一条件といえる。(『ニュース解説室へようこそ! 2006年版』)

(59)そしてまるで傷を負った獣のように、誰からも離れ、心の傷が癒えるまで、ひとりでじっとしています。(鈴木秀子『愛する人、愛される人の9つの性格』)

(60)深く静かに潜れば、誰からも隠れることは可能でやんしょ。(矢崎泰久『わが心の菊池寛』)

(61)ギャビーは半円形の窪地のいちばん端まで歩いていった。誰からも、できるかぎり遠い場所だ。(ジョン・ヴァーレイ(著)/小野田和子(訳)『ウィザード』)

例(58)における「誰+から+も」は「徴収する」のような肯定形を伴い、徴収の対象或いは税金の出所を表している。例(59)(60)(61)における「誰+から+も」はそれぞれ「離れる」「隠れる」「遠い」といった肯定形を伴い、抽象的な離れる場所或いは回避の対象を表すものとして機能している。

4.4. 「誰+より+も」の構文的分布

格助詞の「より」は比較の基準を表す。「誰+も」と

一緒になって使われる場合、主語の表す人物が述語の表す動きについて、ほかと比べてみて「程度が最高」であるという意味を表す。

(62)松岡は、現金授受について誰よりも早く供述し、しかも、松岡が語らなければ検事が知るわけがないことを多数供述している。(立花隆『ロッキード裁判とその時代』)

(63)最初は参加を渋ったリンだったが、今は誰よりも旅行を楽しみにしている様子である。(もりたけし『ストラトス・フォー the extra sight』)

(64)「この会社のことは自分たちがいちばんよく知っている」「業界のことは誰よりも詳しい」、などの意識が将来構想をゆがめてしまう危険性があるのだ。(手塚貞治『株式公開を目指す企業のためのビジネスプラン策定マニュアル』)

例(62)(63)(64)に示すように、「誰+より+も」はそれぞれ「早く供述する」「旅行を楽しみにしている」「詳しい」を伴い、文脈からして、ほかのすべての人よりも優っているという意味を表すのである。そのような意味・用法の「誰+より+も」は程度副詞に近く、連用修飾語のような意味・機能を担っていると思われる。それがゆえに、例(62)(63)(64)における「誰よりも早く供述する」「誰よりも旅行を楽しみにしている」「誰よりも詳しい」は「もっとも早く供述する」「もっとも旅行を楽しみにしている」「いちばん詳しい」のように置き換えて言うことが可能である。

5. まとめ

本稿では意味特徴と統語特徴を視野に入れて「典型」と「非典型」の二つの角度から肯定形を伴う場合の「誰+も」の意味・用法について分析を行った。分析の結果は次のようにまとめられる。

①肯定形を伴う「誰+も」の典型的な意味・用法はさらに三つに分類することができる。それは格助詞の「が」を伴う場合、格助詞の「を」を伴う場合、格助詞の「の」を伴う場合のように分布している。ただし、格助詞の「が」「の」を伴う場合、「誰もが」「誰ももの」のような形でしか現れることがなく、「を」を伴う場合は「誰をも」「誰もを」の二つのパターンがある。また、「誰+も」は「～でも～でも」や「～も～も」によって構成された並列関係を受けて叙述を展開することができる。

②肯定形を伴う「誰+も」の非典型的な意味・用法は格助詞の「に」「と」「から」「より」と一緒になって文

を展開することに分布している。ただし、「が」「の」は必ず「誰+も」の後において機能するのに対して、「に」「と」「から」「より」は「誰」と「も」の間において機能しなければならない。つまり、「誰+に+も」「誰+と+も」「誰+から+も」「誰+より+も」のような形で用いなければならない。

注 (Notes)

- 1) 詳しくは寺村秀夫(1991)84ページを参照されたい。
- 2) 10人の日本語母語話者に対してアンケート調査したところ、8人から自然な表現であるとの回答を得られた。
- 3) 渡辺実(1996)ではいわゆる格助詞を認めず、従来の格助詞の「が」「を」「に」「と」「で」「から」といったものを連用助詞として位置づけている。「が」「を」「に」は関係構成員力が強く、「と」「で」「から」などは関係構成員力が相対的に弱いとされている。詳しくは渡辺実(1996)223～247ページを参照されたい。
- 4) 「魚は鯛がいい」についての詳しい説明は野田尚史『「は」と「が」』(くろしお出版)の第6章を参照されたい。
- 5) 渡辺実(1996)では副助詞は格助詞の前にも後にも付くとされている。ただし、それは「君にだけ打ち明ける」「君だけに打ち明ける」のような文に限られているとされている。構文的分布について、「だれをも」「誰もを」は「君にだけ」「君だけに」とほぼ同じであり、「副助詞は格助詞の前にも後にも付く」という理論によっても裏付けられる。詳しくは渡辺実(1996)231～247ページを参照されたい。

文献 (References)

- 寺村秀夫(1982).『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 尾上圭介(1983).「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院(404-431).
- 寺村秀夫(1991).『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992).『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版.
- 工藤真由美(1995).『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房.
- 野田尚史(1996).『「は」と「が」』くろしお出版.
- 渡辺実(1996).『日本語概説』岩波書店.
- 沼田善子(2000).「とりたて」『時・否定と取り立て』pp.151-216, 岩波書店.
- 渡辺実著・战庆胜译(2006).《現代日语概论》大连理工大学出版社.
- 日本語記述文法研究会(2009).『現代日本語文法5』くろしお出版.
- 中西久実子(2012).『現代日本語のとりたて助詞と習得』ひつじ書房.
- 姚佳秀(2019).《汉语“谁”和日语“誰”的语义特征及句法功能等对比研究》新华出版社.